


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 沼野恭子 

学位申請者： 古川哲

論 文 名： 繁茂する革命 —1920-1930 年代プラトーフ作品における世界観—

【審査の結果】

本学位請求論文は、ソ連時代を生きた作家アンドレイ・プラトーフ（1899-1951）の主要な小説 5 編を取りあげ、「飛散する花粉のイメージ」を手がかりに、自然と人間の関係を考察したたいへん意欲的な論考で、プラトーフの作品世界の全体像を提示し、刺激的な論点をいくつも提供したオリジナリティあふれる力作である。審査委員会は、論文審査及び最終試験（公開口述審査）の結果にもとづき、審査委員全員一致で、学位申請者に対して博士（学術）の学位を授与するのが適当であると判断した。

なお審査委員会は、沼野恭子を主査とし、中村唯史准教授（山形大学）および本学の西谷修教授、鈴木聡教授、前田和泉准教授の計 5 名で構成された。

【論文の概要】

本論文の筆者である古川氏は、1920 年代から 1930 年代に執筆されたプラトーフの主要な小説 5 作品（『エーテルの道』『チェヴェンゲール』『土台穴』『ためになる』『ジャン』）を精緻に読み解き、詳細な注釈を加えながら、そこに「世界観の連続性」があると同時に「漸進的な変化」が見られることを丁寧に論じている。

参考文献一覧を除いて本文は以下のような構成になっている。

序章

第一章 飛散する花粉のイメージ

第二章 繁茂する革命

第三章 非対称から共感へ

第四章 『土台穴』と『ためになる』における受動性と受難

結論

序章で先行研究を概観し本論文で用いるテキストを確定した後、第一章で、プラトーフ

フ作品を考察する手がかりとして「飛散する花粉のイメージ」というモデルを採用することが述べられている。このイメージはさまざまな形をとってプラトーフの諸作品に現れるが、それらを検討した結果、このイメージは次の4つの要素を有していると規定される。第1に、微少な対象が広大な空間の中に存在すること。第2に、その微小な対象が受動的に動くこと。第3に、その微小な対象が植物的な性質を帯びていること。第4に、微小な対象に革命の期待が込められていることである。

この「飛散する花粉のイメージ」を介して作品を仔細に見ていくと、主人公と自然との関係が徐々に変化していく過程を読みとることができる。第二章、第三章は、この変化のプロセスが詳細に論じられる。

第二章で分析されるのは3作品である。物質を増殖させる技術を探求する物理学者たちについてのサイエンス・フィクション『エーテルの道』（1926）では、「物質の最小単位であるとともに生物でもある」とされる「電子」に「飛散する花粉のイメージ」を見出すことができる。ここには人間と人間でない生物の間に「友愛」を認めようとするコスミズム的な志向も描かれているが、それよりはむしろ人間が自然に作用を加え「搾取」しようとしていると捉えられる。つまり人間は能動的な存在、自然は受動的な存在であり、人間と自然との関係は「非対称的」である。

真の共産主義を求めて放浪する男の物語『チェヴェングール』（1929）では、主人公アレクサンドルが共産主義についての思想をあたかも「大地に根ざすべき植物の種子」のようだと思い描き、実現されるべき共産主義が「繁茂する植物」とされているため、やはり「飛散する花粉のイメージ」と関連づけることができる。『エーテルの道』に比べるとこの長編では、出来事への関与を避けて世界の観察に徹しようとする主人公が、より受動的な存在になっている。

農業集団化および巨大な共同住宅の建設を描いた長編『土台穴』（1930）にも、主人公ヴォーシェフが眺める植物についての描写に「飛散する花粉のイメージ」を見出すことができる。しかし、ここでの自然はもはや人間による観察の対象にとどまっておらず、主体として現れている。自主的に集団行動をする馬たちや、富農撲滅のために人間に協力する鍛冶工の熊など、動物の形象が重要な役割を果たしているからである。ただし、家畜だった馬は「手つかずの自然」ではなく、人間の支配を受けそこから「解放された自然」である。いずれにせよ主人公を含めこの作品に登場する人間はすべて自然からの影響を強く受けており、その意味で『チェヴェングール』よりもさらに受動的な存在へと変化している。

第三章で取りあげられるのは2作品である。『ためになる』（1931）も農業集団化を主題とした作品だが、ここでは語り手が自分自身を客観視したときに「飛散する花粉のイメージ」が浮かびあがる。つまり前作までは主人公の観察する自然の中に現れていたイメージが、この作品では主人公自身の姿になぞらえられており、その意味で「反転」が生じて

いると言える。しかし『ためになる』の語り手が動物（子牛や蜘蛛）に共感を示す点や、放浪しながらも労働になるべく近いところにしようとする点は、『土台穴』のヴォーシェフと共通する資質であり連続性がある。

『ジャン』（1935）は、主人公チャガターエフがジャン族を死の淵から救い出すという任務を帯びて中央アジアの砂漠に派遣される物語だが、ここでも放浪者チャガターエフが「飛散する花粉」として共産主義の理念を民衆に伝えようとしている。チャガターエフが砂漠で二羽の鷲に襲われ身体の一部を食われる場面は、「自然を操作するもの」としてではなく「自然によって手を加えられるもの」としての人間の姿が描かれている。ここで彼が、過酷な環境で生き延びようとする鷲に共感を覚えていることからして、人間と自然（鳥たち）との関係は「対称的」なものに転化したと考えられる。

こうして『エーテルの道』から『ジャン』への道のりを辿ってくると、これらの作品に連続性・同質性がある一方、人間と自然の関係が「非対称」から「対称」になり、主人公が自然に対して「能動」から「受動」に転じ、さらには放浪者である主人公自身が「飛散する花粉」に反転するなど漸進的に変化していることがわかる。

第四章では、1920-1930年代の歴史的な文脈が概説された後、この時期の政治状況に深く根ざした作品である『土台穴』と『ためになる』に絞って「受動性」の意味がさらに深く考察される。農業集団化を強力に推進しようとする中央（共産党）に対して受動的である土台穴の労働者たちは犠牲となることを強いられる。その意味で「受動性」は「受難」と結びついている。『土台穴』のヴォーシェフは自然に分け入り、さまざまな記憶を秘めた物を収集する。これは、死者をめぐる事実の意味を与え「人々の永遠の意味」を求める試みであり、抑圧されたものたちのための「社会主義的復讐」であるという。最終的にヴォーシェフはこの収集という行為を通して「能動性」を得たと言えるだろう。また『ためになる』においては、党への受動性を見せる登場人物は影を潜め、自主的な判断によって党の指令を取捨選択する農場の指導者の姿が肯定的に描かれている。

結論として、党に従順で受動的であることとは別の「社会主義の可能性」が放浪する主人公という形象の内に追求され、現実の社会主義を相対化する試みが行われていたのではないかと考えられる。

【論文の評価と審査の概要】

まず、1920年代から1930年代にかけて執筆されたプラトーフの代表作5編を連続したものとして捉え、「漸進的な変化」の過程を通時的に詳しく論じたところに本論文の何よりも大きな意義がある。プラトーフ研究は近年盛んになっているとはいえ、従来とりわけ日本においては個別のテーマや作品を分析する研究が多かった。それに対して本論文は、プラトーフの作品世界の全体像を包括的に提示しようとするものである。また1920年代の作品群と1930年代の作品群の間に明らかな断絶があると主張する研究者がいるが、

本論文は、プラトーフ作品を貫く連続性の展開を、人間と「自然」、環境や動物との関係の転換（能動性→受動性→対称性）といった観点から明らかにしたもので、「断絶説」に対する一種の反論になり得ていると言える。以上の点から本論が画期的なプラトーフ研究であることは疑いをいれない。

さらに、きわめて個性的で難解であると言われるプラトーフのテキストそのものを重視したところも高く評価されるべきであろう。安易に文芸理論を適応してよしとする態度とも、「抑圧された悲劇の作家」というステレオタイプに依拠して政治的文脈から解釈しようとする態度とも慎重に距離を置き、本論文の筆者はどこまでも真摯にその特異な文体の起伏に寄り添い、ほとんど「素手で」ひとつひとつの感触を確かめた。その結果、読解の過程において非常に魅力的な注釈をいくつも生み出すことになった。

また特筆すべきは、鍵概念のように用いられている「飛散する花粉」という大胆で刺激的なイメージのオリジナリティである。このイメージは各作品に共通する一種のモデルとして扱われているが、たしかに内向的で受動的な主人公は「植物」とよく馴染み、その主人公が放浪するところは花粉が飛び散るさまに喩えることができる。「飛散する花粉のイメージ」を軸に議論を展開するという方法は、プラトーフ作品の本質に迫るきわめて斬新な試みとして評価していいだろう。

審査委員からは次のような指摘や質問が出された。

(1) テキストの読みはいいが、テキスト外の部分、例えば社会との関係やコスミズムとの関連を論じている箇所がやや説得力に欠ける。

(2) 馬や熊といった動物の形象を「自然」と捉えてよいのか。熊は寓意や比喩ではなく、本当に動物なのか。

(3) 「飛散する花粉のイメージ」を論じる手順に問題があるのではないか。直感にもとづくイメージを最初に提示してあるため自らの「仮説」に都合のいい箇所を取り出しているという印象を受ける。また論理展開が強引なのではないかと思われるところが数カ所ある。

(4) 論文の日本語が生硬で洗練されておらず、論旨がつかみにくい。推敲の時間が足りなかったのかもしれないが、鮮やかな花粉の比喩を語る文体としてふさわしくない。

(5) だれの「世界観」なのか、なぜ花粉のメタファーで読み解けるのかにもっと踏み込むべきだった。人間を含む森羅万象の生成変化のなかに共産主義という歴史的現象までも包摂するという、この作家の独特のヴィジョンを、「人間の内在的意識」という観点から捉えるといいのではないか。

古川氏は上記の指摘や批判について、すべて真摯に受け止めたうえで、反論するところは反論し、質問に対しては誠実に答えた。「自然」という言葉の定義が少々曖昧だったこ

とは自身も認めるところであり、また論理的な展開がうまくいかなかったところがあることも自覚しているとの回答であった。

各審査委員のコメントは、本論文の独創性と学術的な意義を充分認め今後のさらなる精進を期待しているからこそなされたものである。審査の席で貴重な議論がおこなわれたということ自体、本論文が刺激的な論点を提供していることの何よりの証拠であろう。例えば、プラトーフが肯定と否定のいずれにも偏ることなく「二重性」を維持していた点でナボコフと対照的であることや、ほぼ同世代の詩人、宮沢賢治とプラトーフの宇宙観に「世界に対する感受性」の相似があることなどたいへん興味深い見解が披露されたが、こうした指摘が誘発されたのは、本論文が優れた研究であったからに他ならない。

以上により審査委員会は、全員一致で本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。